

# 琉球大学学術リポジトリ

## 言語接触論から見たブラジル沖縄コロニア語

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 言語接触, 琉球語, 日本語, ポルトガル語, ピジン, クレオール, 中間言語, 混合言語 キーワード (En): language contact, Ryukyuan, Japanese, Portuguese, pidgin, creole, interlanguage, mixed language 作成者: 儀保, ルシーラ悦子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/29154">http://hdl.handle.net/20.500.12000/29154</a>

## 言語接触論から見たブラジル沖縄コロニア語

儀保ルシーラ悦子

- I. ブラジルの沖縄系移民社会における言語接触
- II. 言語接触と第一言語の変容
- III. 第二言語習得とブラジル沖縄コロニア語の発生
- IV. ブラジル沖縄コロニア語の二つの意味
- V. ブラジル沖縄コロニア語の系統・発生方法
- VI. 接触言語のタイプとブラジル沖縄コロニア語の分類
- VII. 結論

キーワード: 言語接触, 琉球語, 日本語, ポルトガル語, ピジン, クレオール, 中間言語, 混合言語

### I. ブラジルの沖縄系移民社会における言語接触

1908年にブラジル移民が開始して以来、沖縄系移民をめぐって、言語接触をはじめ、様々な言語現象が絶えず起きている。それまでに琉球語と琉球クレオロイド<sup>1)</sup>しか話せなかった沖縄系移民の第一世代<sup>2)</sup>(以下、一世)は、他の言語を話す人と接するようになり、言語と言語が接触するようになった。

言語接触は、早速ブラジルに向かう船の中で起こりはじめた。同船した他の市町村出身の一世と接することによって琉球諸方言の接触が起こり、移民先の fazenda (農園) や feira (露天商) で他府県出身の日本人移民と交流することによって本土日本語との接触が起こった。そして、現地のブラジル人との付き合いでポルトガル語との接触が起こるようになった。この3パターンの言語接触は、現在でも続いている。

#### 接触パターン①

沖縄系移民 (一世) ===== 他市町村の沖縄系移民

【琉球諸方言の接触】

#### 接触パターン②

沖縄系移民 (一世) ===== 他府県出身の日本人移民

【琉球語と琉球クレオロイド及び本土日本語の接触】

#### 接触パターン③

沖縄系移民 (一世) ===== ブラジル人

【琉球語と琉球クレオロイド及びポルトガル語の接触】

現在、接触パターン①は、沖縄県人会の集会や親族の付き合いで見られる。一世の中では、沖縄本島出身者が最も多く、ブラジルで話される琉球語は、沖縄の北部方言と南部方言が中心となる。沖縄の様々な地域から移住した人たちが同じ地域に住むようになり、ブラジルでは沖縄以上に琉球諸方言の接触とそれに伴う言語変容が起きているのである。方言と方言が接触することによってブラジルではコイネ<sup>3)</sup>が発生しているといえる。

接触パターン②は、現在沖縄系移民の自営業への転職のため移民初期ほど頻繁に起きていないが日本人会などの集会で見られる。世界最大の沖縄系移民社会と言われているものの、ブラジルの沖縄県系人（以下、沖縄系人）の割合は日系社会全体のたった1割程度に過ぎず、言語的に他府県系人に影響されやすい状況に置かれている。残りの9割のうち都道府県単位でマジョリティーとして存在する団体がないため主要になる日本語の変種もないが、言語的特徴（標準日本語と異なるところ）から沖縄系人の日本語では西日本方言<sup>4)</sup>の影響が際立つ。

接触パターン③は、あらゆる環境で起きている。沖縄系人は、完全にブラジル社会へ同化し、現在、ポルトガル語から離れた言語生活は考えられない。

このように、言語が接触することによって一世の第一言語（以下、L1）に変化が生じた。琉球語にポルトガル語の語彙が借用されるようになり、琉球クレオロイドには同じくポルトガル語の語彙が借用されると同時に西日本方言の文法形式も借用されるようになった。次に、用例の分析を通して言語接触がL1に如何なる変化をもたらしているのかを見ていくことにしよう。

## II. 言語接触と第一言語の変容

沖縄系社会では、言語接触に伴い他の接触要素の影響によるL1の変容が起きているわけだが、基本的に音韻的な影響は起こらず、よく見られるのは他の接触要素の語彙の借用及び文法形式の借用である。それは、一世の言語だけでなく、一世の子ども（以下、二世）の言語にも同じ現象が見られる。一世にとって琉球語または琉球クレオロイドがL1であり、二世にとってポルトガル語がL1である。以下、他の接触要素からの語彙または文法形式が借用され、言語が混交した一世の琉球語、一世の琉球クレオロイド、二世のポルトガル語の用例を挙げる。なお、本稿で挙げる用例は、筆者が2009年9月～2013年3月の期間にブラジルで行なった調査で得られたものである。

### ▶一世の琉球語にポルトガル語が借用される場合

01. わったーや わらび そーいねー うみんかい いちーねーて、わらばーたー むるよー camiseta ぐわーとう はんずばんぐわーびかーし ちちゅしえーやー。(私たちは子ども)

もの頃海に行く時、子どもたちはみんな安っぽい T シャツと安っぽい半ズボンだけ着てね)

02. Mudar すし きまとーるばーい。(移転するのが決まっているの?)

例 01 では、ポルトガル語の名詞「camiseta」(= T シャツ) が借用され、琉球語の接尾辞「ぐわー<sup>5)</sup>」と組み合わせたり、「安っぽい T シャツ」という意味をあらわしている。

例 02 では、ポルトガル語の動詞「mudar」(= 移転する) が借用され、琉球語の動詞「スン」と組み合わせたり、「移転する」という意味をあらわしている。

▶一世の琉球クレオロイドにポルトガル語が借用される場合

03. Novela もあんまり見てないよ、marido がいつもニュースばかり。

04. 明日は titio の visita しに病院に行く。

例 03 では、ポルトガル語の名詞「novela」(= ドラマ) と「marido」(= 夫) が借用されている。

例 04 では、ポルトガル語の名詞「titio」(= おじさん) と「visita」(= お見舞い) が借用されている。「visita」は日本語の動詞「する」と組み合わせたり、「お見舞いする」という意味をあらわしている。

▶一世の琉球クレオロイドに本土日本語（西日本方言）が借用される場合

05. 会社に行きよる。(会社に行きつつある)

06. 木が倒れとる。(木が倒れている)

例 05 では、西日本方言の「しよる」(行きよる)、例 06 では西日本方言の「しとる」(倒れとる) 形式が借用されている。本来、琉球クレオロイドにはこれらの形式は存在せず、一世が移民後に自らの言語に取り入れたものだと考えられる。

▶二世のポルトガル語に日本語が借用される場合

07. Vamos começar a reunião. Começando aqui com um omiyage que os senseis trouxeram pra gente. (会議を始めよう。始めに、先生方が私達に持ってきてくれたお土産から)

08. É taihen ser jikouinchou de evento. (イベントの実行委員長を務めるのは大変だ)

例 07 では、日本語の「お土産」、「先生」という名詞が借用されている。Sensei (先生) という名詞に複数の意味をあらわす「s」が付加され、「senseis」は「先生方」という意味

をあらわしている。

例 08 では、日本語の第二形容詞「大変」と名詞の「実行委員長」が借用されている。更に、「実行委員長」は「じっこういいんちょう」ではなく「\*じこいんちょう」と発音されているが、ポルトガル語母語話者にとって日本語の促音や長音は発音が難しいのである。

▶二世のポルトガル語に琉球語が借用される場合

09. Na verdade acho que naichaa também faz isso só que numericamente eles não são tão expressivos quanto o uchinaanchu né. (本当は他府県系人もそうする（県系人同士で集まる）と思うけど人数的に彼らは沖縄系人ほど目立たない)

10. Eu andei percebendo que cultura uchinaanchu é rica. (沖縄の文化は豊であることに最近気づいてきた)

例 09 では、琉球語の名詞「ナイチャー」（＝内地の人）と「ウチナーンチュ（＝沖縄の人）」が借用されている。本来、「ナイチャー」は「日本本土の人」、「ウチナーンチュ」は「沖縄の人」という意味をあらわすが、沖縄系社会では、前者は「他府県系人」、後者は「沖縄系人」という意味で用いられる。

例 10 では、例 09 のように琉球語の名詞「ウチナーンチュ（＝沖縄の人）」が借用されているが、ここでは、「uchinaanchu」は「cultura」（＝文化）という名詞を修飾する形容詞として使われている。それは、ポルトガル語では、「okinawano/okinawana」（＝沖縄の人）と「dialecto okinawano」（＝沖縄の方言）、「cultura okinawana」（＝沖縄の文化）」のように名詞も形容詞も同じ単語であらわされるからである。なお、ポルトガル語では名詞の性によって形容詞の性も変わるが、ここでは、「cultura」という名詞が女性名詞であるにも関わらず「uchinaanchu」は女性形（例えば、\*uchinaanchuana）にならない。借用語において、男性・女性の区別がなくなるのである。

沖縄系社会では、例 1～10 のような言語接触による L1 の変容の他に、第二言語（以下、L2）の習得過程（一世の場合は、ポルトガル語の習得過程、二世の場合は、琉球語または日本語の習得過程）においても言語接触が起きている。次は、そのことについて述べる。

### Ⅲ. 第二言語習得とブラジル沖縄コロニア語の発生

Mackey (2006 : 434) は、“Second language learning refers to the process of acquiring a non-native language that is spoken by the community where the learner is living, while foreign language learning refers to the process of acquiring a non-native language that is not spoken by the surrounding community” のように「第二言語習得」と「外国語習得」を区別している。こ

の定義に従えば、一世がブラジルで学ぶポルトガル語は L2 であり、二世が家庭内やコミュニティ内で学ぶ琉球語と日本語（＝琉球クレオロイド）も L2 であるといえる。

更に、Mackey は、“ (...) a second language (L2) refers to any language learned after one's first language (L1), no matter how many others have been learned.” と述べており、ポルトガル語の前に既に琉球語または琉球クレオロイドを L2 として習得している琉球語・琉球クレオロイドバイリンガル話者にとってもポルトガル語は L2 であるといえる。

一方で一世がポルトガル語を習得する過程で琉球語または琉球クレオロイドが影響を及ぼし、他方で二世が琉球語または日本語を習得する過程でポルトガル語が影響を及ぼす。

更に、L1 の影響だけでなく、他の接触要素との接触・混交が起こり、沖繩系人は沖繩系人特有の言語を持っている。筆者は、沖繩系人の話す言語を「ブラジル沖繩コロニア語<sup>6)</sup>」と呼んでいる。

習得の目標言語（以下、TL<sup>7)</sup>）によって、ブラジル沖繩コロニア語を以下の 3 つのタイプに分けることができる。

- ・琉球語が TL の場合：ブラジル沖繩コロニア琉球語（以下、BOCR）
- ・日本語が TL の場合：ブラジル沖繩コロニア日本語（以下、BOCJ）
- ・ポルトガル語が TL の場合：ブラジル沖繩コロニアポルトガル語（以下、BOCP）

また、Mackey によれば、L1, age, gender, working memory, motivation, and context によって L2 習得過程に個人差が出てくるが、年齢を考えれば、大人になってからポルトガル語を学び始めた一世より子どもの頃から家庭内で親の言語と接触している二世の方が L2 習得に有利な状況にあるといえる。ただし、ポルトガル語を話さざるを得ない環境に置かれている一世は二世より L2 を習得するモチベーションが高いといえよう。このような違いがあるため、一世のポルトガル語の習得度合いと二世の琉球語、または日本語の習得度合いに差が見られる。一般的に言えば、一世の BOCP の方が L1 の影響が明白であり、二世の BOCR, BOCJ より L2 の習得度合いが低いといえる。

まず、音韻的には、ポルトガル語に一世の L1 にない音韻的な特徴 (/r/ と /l/, /b/ と /v/ の区別、鼻音など) が多く、一世はポルトガル語の音韻を習得するのに困難がある。確かに、琉球語にも二世にとって発音が難しいと思われる音韻（語頭にあらわれる詰まる音「っやー（＝おまえ）、「っんま（＝馬）」など<sup>8)</sup>）があるが、一世に比べてその数は多くない。また、二世は家庭内で親の話す琉球語と琉球クレオロイドを聞きなれている点もあり、二世の BOCR, BOCJ は一世の BOCP ほど音韻的に L1 の影響を受けていないといえる。

また、文法的にも一世のポルトガル語のほうが L1 の影響が目立つ。それは、一世が周りのポルトガル語モノリンガル話者とコミュニケーションをとるために不正確でも文法を

意識せずにポルトガル語を話しているのに対し、二世は、琉球語と日本語（＝琉球クレオロイド）の文法がわからない場合、一世がポルトガル語を理解する能力があるため、L2を使わずにポルトガル語で話しているからである。

次に、BOCP, BOCR, BOCJ の順にブラジル沖縄コロニア語の用例を見ていくことにしよう。

▶ BOCP

BOCP は、一世が L2 としてポルトガル語を習得する過程に L1（琉球語、琉球クレオロイド）の影響を受けて生じたブロークンな言語体系、つまり Broken Portuguese である。例えば、例 11～15 のように、ポルトガル語が堪能ではない高齢者の間では、ポルトガル語が TL であるにも関わらず L1 が構造的に影響し、語順が琉球語、琉球クレオロイドのままあらわれる現象がよく見られる。以下の用例は、表面的にはポルトガル語に見えるが、いずれも語順を成しているのは一世の L1 であり、語彙の借用・混交も起きている。

11. Manhã cedo tudo dia ラジオ escuta.  
morning early every day radio to.listen : PRES : 3SG  
標準ポルトガル語 : Escuto rádio todos os dias de manhã cedo.
12. Você= が falar num tá  
you = NOM to.say : INF no to.stay : PRES : 3SG  
muito entende.  
hardly to.understand : PRES : 3SG  
標準ポルトガル語 : Não entendo muito o que você fala.
13. Meio-dia= に encontrar ね。  
midday = TEMP to.meet : INF DSC  
標準ポルトガル語 : Vamos encontrar ao meio-dia.
14. Hoje quarto= の limpar した。  
today room=GEN to clean : INF to.do : PAST  
標準ポルトガル語 : Hoje limpei o quarto.
15. この garrafa- グワー separar して、  
this bottle-DIM. to.separate : INF to.do.MED  
lixo= に jogar しなさい。  
garbage.can=DAT to.throw.away. INF to.do.IMP  
標準ポルトガル語 : Separa esta garrafa e joga no lixo.

▶ BOCR

BOCR は、二世が L2 として琉球語を習得する過程に L1（ポルトガル語）の影響を受けて生じたブロークンな言語体系、つまり Broken Ryukyuan である。例えば、例 16～17 ではポルトガル語の影響によって誤用が生じている。

16. ちぬー わったー まやーや まーちゃん。(昨日、うちのネコは死んだ)

17. わんねーいーび ちっちえーん。(私は指を切った)

例 16 では、「まーちゃん」(=死んだ)は「しじゃん」(=死んだ)の間違いである。琉球語では、「まーちゃん」は人間が死んだときにしか用いられないが、ポルトガル語には、人間と動物の死を区別する動詞がないため、二世はこのような間違いをおかしてしまうことがある。

例 17 では、「ちっちゃん」(=切った)というべきところを話者は「ちっちえーん」(=切ってある)と言っている。「ちっちえーん」は、意図的に「切る」という動作を行ない、現在その効力が残っていること、つまり「現在パーフェクト」をあらわす場合に用いられる。したがって、この用例は「私は意図的に指を切っておいて、今、指が切ってある」のような意味をあらわし、誤解を招いている。ポルトガル語では、単純過去も現在パーフェクトも同じ動詞の形（完全過去形）であらわされるため、二世は琉球語のこの使い分けを意識しないのである。

▶ BOCJ

BOCJ は、二世が L2 として日本語を習得する過程に L1（ポルトガル語）の影響を受けて生じたブロークンな言語体系、つまり Broken Japanese である。例えば、例 18～19 ではポルトガル語の意味的な影響によって誤用が生じている。

18. Bicicleta で歩くのはわからない。(自転車に乗ることはできない)

19. ご飯を連れてこなくてもいい。(ご飯を持ってこなくてもいい)

例 18 では、ポルトガル語の「andar de bicicleta」(=自転車をこぐ／自転車に乗る)の「andar」という動詞は基本的に「歩く」という意味をあらわすため、二世は「andar→歩く」のようにポルトガル語の表現を日本語に直訳している。また、「わからない」という動詞によって能力可能があらわされているが、この場合は「できない」が正しい。ポルトガル語では、「saber」という動詞が「知識を持っている」と「能力がある」の両方の意味をあらわすことができ、話者はそれに影響されて、「知識を持っている」の「わかる」と「能力がある」



の「できる」を区別せずこのような誤用をおかしているのである。

例19では、「ご飯を連れてくる」と言っているのは、ポルトガル語では、日本語の「モノを持ってくる」と「ヒトを連れてくる」のような使い分けがなく、モノでもヒトでも同じ動詞 (trazer) であらわされるからである。

#### IV. ブラジル沖縄コロニア語の二つの意味

以上、L1の変容した形とL2のブロークンな形を見てきたが、実際の会話では、両者は区別されず同一の言語コードとして使用される。例えば、以下に挙げている会話①では、日本語を言語コードとして選択して、一世はL1（この場合は、琉球クレオロイド）の変容した形を使用し、二世はBOCJを使用している。一方、会話②では、ポルトガル語を言語コードとして選択して、一世はBOCPを使用し、二世はL1（この場合は、ポルトガル語）の変容した形を使用している。

##### 会話①

話者A（一世）：洗濯物干すのを ajuda しなさい。(L1の変容した形)

(洗濯物を干すのを手伝いなさい。)

話者B（二世）：待って。今ご飯洗ってるから。(BOCJ)

(待って。今お米を洗っているから。)

##### 会話②

話者A（一世）：Guarda dinheiro no gaveta pequeno. (BOCP)

to.put.away.IMP money in drawer small

(標準ポルトガル語：Guarda o dinheiro na gaveta pequena.)

話者B（二世）：Não, é あぶない!

No to.be.PRES : 3SG to.be.dangerous.PRES

Vou guardar no たんす。(L1の変容した形)

to.put.away.FUT. 1SG in chest

(標準ポルトガル語：Não, é perigoso! Vou guardar no armário.)

会話①では、話者Aは、ポルトガル語の「ajuda = 手伝い」という単語を借用し、L1（琉球クレオロイド）に混交させている。話者Bの発話の「ご飯」は「お米」の間違いであり、「米」と「飯」を区別しないポルトガル語の影響が誤用の原因となっている。

また、会話②では、まず、定冠詞の「o」が抜けている。そして、「gaveta」が女性名詞であるため、「no gaveta pequeno」ではなく、前置詞も形容詞も女性形になり「na gaveta

pequena」が正しい形である。これらの誤用は、冠詞を持たない、そして男性形と女性形を区別しない L1（琉球クレオロイド）の影響によるものである。話者 B は、日本語の「あぶない」と「たんす」という単語を借用し、L1（ポルトガル語）に混交させている。

儀保 2011, 2013 では L1 の変容した形と L2 のブロークンな形を区別せず、沖繩系社会で話される言語全般をブラジル沖繩コロニア語と呼んでいたが、本稿ではその区別を行ない、より詳しく定義したい。広い意味では、L1 の変容した形も L2 のブロークンな形も沖繩系社会の言語であるため、両者をブラジル沖繩コロニア語と呼ぶことができる。ただし、厳密に言えば、L1 の変容した形は、新しく発生した言語ではなく、もともと存在していた琉球語の変容した形、琉球クレオロイドの変容した形、ポルトガル語の変容した形であるため、L2 の習得過程において新しく発生した BOCR, BOCL, BOCP と区別する必要がある。広い意味では、ブラジル沖繩コロニア語とは、沖繩系人の話す言語の総称であり、狭い意味では、ブラジル沖繩コロニア語は沖繩系社会で L2 の習得過程において初めて発生した言語体系のことを指す。つまり、広義のブラジル沖繩コロニア語には L1 の変容した形も含まれるが、狭義のブラジル沖繩コロニア語には L1 の変容した形は含まれない。

この二つの見方があるが、どちらの意味でもブラジル沖繩コロニア語は琉球語、琉球クレオロイド、本土日本語、ポルトガル語の接触から成り立っているといえる。次に、このように多言語要素から成り立つブラジル沖繩コロニア語の系統・発生方法について述べていく。

## V. ブラジル沖繩コロニア語の系統・発生方法

世界には、同系統の方言と方言の接触（例えば、沖繩県内における諸方言の接触）、同系統の言語と言語の接触（例えば、ラテンアメリカにおけるポルトガル語とスペイン語との接触）、系統の異なる言語と言語の接触（例えば、北米における英語とスペイン語との接触）など様々な言語接触のタイプが見られる。沖繩系社会では、同系統の方言と方言（琉球クレオロイド⇔本土日本語諸方言）、同系統の言語と言語（琉球語⇔本土日本語）、系統の異なる言語と言語（琉球語、琉球クレオロイド、本土日本語⇔ポルトガル語）の接触が同時に起きている。しかも、接触の要素の一つである琉球クレオロイド<sup>9)</sup> 自体が接触言語であり、ブラジル沖繩コロニア語は複雑な構造を持っている。

ブラジル沖繩コロニア語の系統・発生方法を知るためには、まず、各要素の系統・発生方法を見ていかなければならない。なお、ここで「発生方法」とは、その言語が「分裂」から発生したのか、「接触」から発生したのかということである。まず、琉球語と日本語は、系統論的に見て親族関係にあり、日本祖語の分裂から発生した姉妹語である。図 1 では、

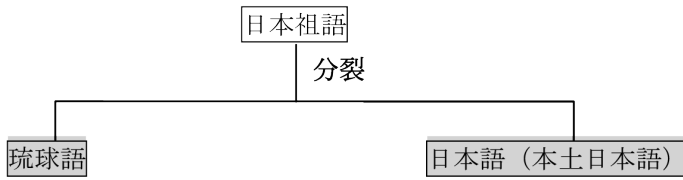


図1 日本語および琉球語の系統・発生方法

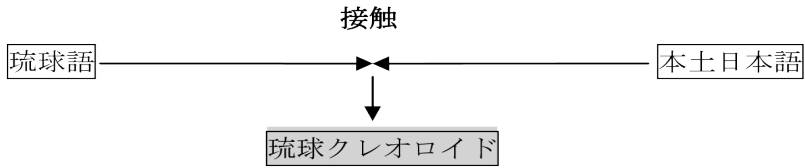


図2 琉球クレオロイドの系統・発生方法

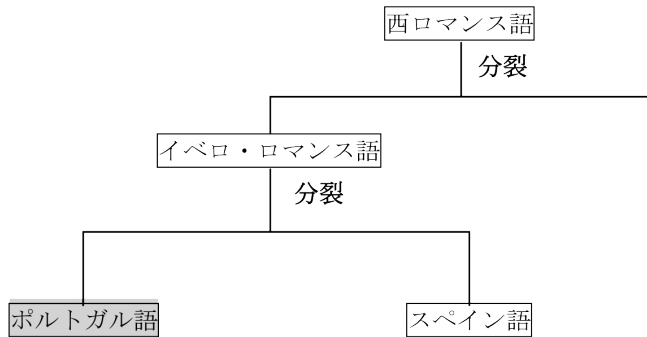


図3 ポルトガル語の系統・発生方法

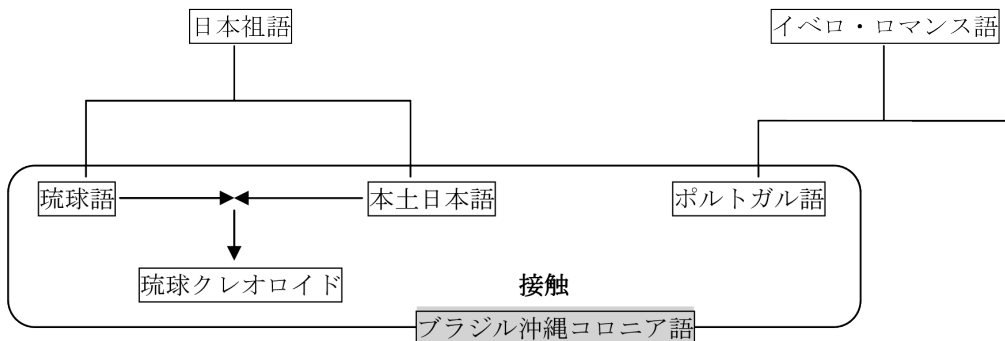


図4 ブラジル沖縄コロニア語の系統・発生方法

その関係を示している。

また、図2で示しているように、琉球クレオロイドとは移民前に沖繩において、琉球語と本土日本語との接触によって発生した接触言語である。

そして、ポルトガル語は、図3で示しているように、スペイン語と並び、イベロ・ロマンス語の分裂から発生した言語である。

この3つの図をあわせると、ブラジル沖繩コロニア語の系統および発生方法がわかる。図4のようになる。

図4で示しているように、ブラジル沖繩コロニア語は、日本祖語とイベロ・ロマンス語の系統をひき、琉球語、本土日本語、琉球クレオロイド、ポルトガル語の接触から成り立つ言語である。ここでは、ブラジル沖繩コロニア語は、「日本祖語・ロマンス語系の接触言語」と見なしておく。ブラジル沖繩コロニア語の他に、「日本祖語・ロマンス語系の接触言語」という系統・発生方法を持つ言語には、ポリビア、アルゼンチン、ペルーの沖繩系移民社会で話される言語がある。

## VI. 接触言語のタイプとブラジル沖繩コロニア語の分類

接触言語が発生した社会的な状況、接触言語の要素となる言語の数や系統、発生した言語のコミュニケーション手段としての社会的な役割、母語話者がいるか否かによって、世界の接触言語は、ピジン、クレオール、準クレオール、中間言語、ネオ方言、コイネ、混合言語など様々なタイプに分類される。ロング(2010:2)は、接触言語の分類に関して、「接触する言語の数や類似性の高さによって、違う結果になる（違う類の接触言語が生まれる）から、それぞれの場合に違う名称が使われる」と述べている。

接触する言語の数という点では、ブラジル沖繩コロニア語は、3つ以上の言語の接触から生じる「ピジン」の分類に当てはまり、2つだけの言語の接触から生じる「混合言語」の分類から外れるといえる<sup>10)</sup>。また、類似性の高さを基準にすると、ブラジル沖繩コロニア語では「類似性の高い言語」(琉球クレオロイド⇔本土日本語)と「類似性の低い言語」(琉球語⇔琉球クレオロイド/本土日本語⇔ポルトガル語)が同時に接触しているため、タイプの判断が困難である。

また、当該言語は沖繩系コミュニティ内で話される言語として見るのか、沖繩系コミュニティを超えて日系コミュニティで話される言語として見るのか、更に、日系社会を超えてブラジル社会で話される一つの言語として見るのかによって、それぞれの果たす社会的な役割が異なるため、その分類も異なってくる。

ロングは、「うちなーやまとうぐち（琉球クレオロイド）」を接触言語の様々なタイプと比較してどのタイプに当てはまるかを検証している。その結果、うちなーやまとうぐちは

従来報告されたもののいずれにも当てはまらず、新しい種類として新設すべきという結論に至っている。本稿では、ロングと同じ方法をとってブラジル沖繩コロニア語の分類を検証する。

筆者が比較対象として選んだのは、接触言語の中でよく知られている「ピジン」と「クレオール」、L2の習得過程で生じるという「中間言語」、そして言語と言語が同等に近い状態で混ざりあう「混合言語」の4種類である。結論からいえば、ブラジル沖繩コロニア語も完全に当てはまる接触言語のタイプがない。だが、分類ができなくても、他の接触言語のタイプと比較することによってブラジル沖繩コロニア語とはどのような言語体系であるのかがわかり、これは有意義な試みだと思われる。

### 1. ピジンとブラジル沖繩コロニア語

ロング(2010:5)によれば、「ピジンは複数の言語の話者がお互いの言語が理解できない状況で集まるときに自然発生的に生じる単純化された言語体系である」。それに加え、Thomason&Kaufman1988, Rickford&McWhorter1998, Holm2010の記述を参考にすると、ピジンの特徴として次のものが挙げられる。

- (A) 多言語社会で生じる。
- (B) 母語を異にする話者の間で生じる。
- (C) ピジン話すことによって異なる母語を持つ相手と相互理解が図れる。
- (D) 語彙は社会的に優位にある言語 (superstrate language<sup>11)</sup>) に由来する。
- (E) 社会的に下位にある言語 (substrate language (s)<sup>12)</sup>) は音韻、文法に影響を及ぼす。
- (F) 語彙の数が少ないため使用されるドメインが限られている。
- (G) 文法的に単純化されている。
- (H) ピジンは話者の母語 (native language) と併存する。

ピジンは既にあるL1を持つ話者の間で新しく発生する言語であるため、ここでは、広義のブラジル沖繩コロニア語に含まれるL1の変容した形を検証から除外し、BOCR, BO CJ, BOCPのみ取り上げて表1のように比較している。(A)～(H)に従えば、ブラジル沖繩コロニア語はピジンとして見なされるための要件を満たしていないことがいえる。ブラジル沖繩コロニア語が完全に当てはまるのは、(A)と(H)の2つの条件だけである。

ブラジル沖繩コロニア語のどのタイプもブラジル、焦点を当てれば、沖繩系社会という多言語社会で発生しているため、(A)の条件に当てはまるといえる。

しかし、ピジンとは異なり、ブラジル沖繩コロニア語は、母語を異にする話者の間で発

表1 ピジンとブラジル沖繩コロニア語との比較<sup>13)</sup>

ピジン	BOCR	BOCJ	BOCP
(A) 多言語社会で生じる	○	○	○
(B) 母語を異にする話者の間で生じる	×	×	×
(C) ピジンを話すことによって異なる母語を持つ相手と相互理解が図れる	×	×	×
(D) 語彙は社会的に優位にある言語 (superstrate language) に由来する	×	×	○
(E) 社会的に下位にある言語 (substrate languages) は音韻、文法に影響を及ぼす	×	×	○
(F) 語彙の数が少ないため使用されるドメインが限られている	×	×	×
(G) 文法的に単純化されている	△	△	△
(H) ピジンは話者の母語 (native language) と併存する	○	○	○

生じた言語ではなく、沖繩系社会内で作り上げられた言語体系である。そのため、当該言語を使用することによって、母語を異にする話者同士の相互理解が図れるとはいえない。したがって、(B) の条件にも (C) の条件にも当てはまらない。

BOCP というタイプを見た場合、語彙は社会的に優位にあるポルトガル語 (superstrate language) に由来するため、(D) の条件に当てはまるといえる。しかし、BOCR と BOCJ を見た場合、いずれも語彙的に substrate languages (前者は琉球語、後者は日本語) に由来するため、(D) の条件に当てはまらない。

音韻、文法の特徴に関して、一世の BOCP の場合、substrate language である琉球語と琉球クレオロイドの影響が見られるため、(E) の条件に当てはまるといえるが、BOCR と BOCJ では、superstrate language であるポルトガル語が影響を及ぼしているため、この場合、(E) の条件に当てはまらない。

ブラジル沖繩コロニア語の使用は話し言葉に限られているが、どのタイプにおいてもその語彙の数は少なくない。したがって、(F) の条件にも当てはまらない。

文法の単純化に関して、一世の BOCP で見られるように、名詞、形容詞の男性形⇄女性形、名詞、形容詞、動詞の単数形⇄複数形の区別がなくなり、単純化される例もあるが、全体的に見れば複雑な文法体系が保たれている。したがって、(G) の条件にも当てはまらない。

最後に、ブラジル沖繩コロニア語は琉球語、琉球クレオロイド、ポルトガル語と併存し

ているため、(H) の条件に当てはまるといえる。

以上のことから、ブラジル沖繩コロニア語は、ピジンではないとの結論に至る。

ただし、ブラジル社会全体で話される言語の一つのパラエティとして考えれば、移民初期のBOCPは、一時的にピジンの条件を満たしていた可能性も考えられる。移民初期には、沖縄県人と中国人、イタリア人、ドイツ人などの他の移民社会との接触があった。お互い異なる母語を持ち(A)、(B)、意思の疎通を図るために(C) 語彙がポルトガル語(superstrate language)に由来する言語のバリエーション(D)を生み出した。その作り上げられた言語は、音韻と文法において、それぞれのL1(substrate language)に影響されながらも(E)、移民社会のリンガフランカとして使用されていた。しかし、その言語は農園などの限られた場所で使用され、語彙も少なく(F)、文法も単純化されていた(G)と考えられる。そして、家庭内ではそれぞれのL1が使用されていた(H)。このように、移民初期のBOCPはピジンの特徴を持っていたと考えられる。しかし、かつての(沖縄県人を含む)日本人は、風習の違いによって他の外国人コミュニティとは積極的に関わらず、接触する場面がそれほど多くなかった。そのため、このようにピジンが生じたとしても、定着せず一時的にしか存在しなかったと思われる。

## 2. クレオールとブラジル沖繩コロニア語

「クレオールは「ピジンの母語化による拡張」であり、子供たちによって創造されるクレオールは(ピジンと違って)完全な言語体系を成している」(ロング 2010: 14)。言い換えると、ピジンが話される地域で生まれた子どもたちが親の世代で発生した言語をL1として習得するようになると、その言語は日常生活のあらゆる事柄を表現するために使用されるようになり、語彙の数が増え、文法も複雑になっていく。このプロセスはクレオール化(creolization)と呼ばれる。

表2では、ピジンと同様に、L1の変容した形を除き、ロングがクレオールの特徴として挙げているものを基準にしてBOCR、BOCJ、BOCPにクレ奥ールの性質があるのかを検証している。

(ア) 一般的に言えば、二世はポルトガル語母語話者であり、BOCR、BOCJ、BOCPの母語話者は存在しない。ただし、過去には子どもが親の言語(琉球語または琉球クレオロイド)をL1として習得したケースもある。この場合は、BOCRとBOCJの母語話者が誕生したといえる。しかし、学校教育を受け始める時期(6~7歳)になり、その子どものポルトガル語力は琉球語または日本語の能力を上回り、BOCRまたはBOCJはL2として使用されるようになる。

(イ) BOCRとBOCJの場合、親の言語に混ざった他接触要素(この場合は、西日本方

表2 クレオールとブラジル沖縄コロニア語との比較

クレオール	BOCR	BOCJ	BOCP
(ア) それまでいなかった母語話者が誕生する	△	△	×
(イ) ピジン化段階で混ざった他接触要素が残る（混交化）	○	○	×
(ウ) 起点言語(source language)より単純化されている	△	△	△
(エ) 起点言語(source language)より合理化されている	×	×	×
(オ) 内的拡張	×	×	×

言の要素が他接触要素だといえる）が二世の言語に受け継がれることがある。しかし、ポルトガル語の場合は、二世が親の話すBOCPを受け継がれたとしても学校などで起こるブラジル人との付き合いによって早い段階で標準ポルトガル語に変わるため、他接触要素が残ることはない。

(ウ) 起点言語 (source language) より単純化されているという点に関して、ブラジル沖縄コロニア語のどのタイプにおいても単純化が起こる場合（例えば、二世のBOCJでは、助数詞の～枚、～本、～個、～台は使用されず、モノであれば形を問わず全て「一つ、二つ、三つ……」と数えられる）もあるが、それは一般的ではない。

(エ) ロングによれば、「合理化されている」とは「分析的、規則的である」という意味だが、ブラジル沖縄コロニア語のどのタイプにおいてもL1の影響の違いや言語の運用力の違いによる個人差が見られ、起点言語 (source language) より規則的であるとは言い難い。

(オ) ロングによれば、「内的拡張」とは「接触によらない拡張」のことだが、ブラジル沖縄コロニア語のどのタイプにおいても音韻変化や語彙の意味の拡張などの接触による現象が起きており、内的拡張は起きていないと思われる。

以上のことから、ブラジル沖縄コロニア語は、クレオールの分類に当てはまらないとの結論に至る。また、ブラジル沖縄コロニア語をクレオールの一種として分類するには、その前にピジンの特徴を持ったブラジル沖縄コロニア語があったと見なさなければならない。しかし、前述したように、ピジンとして考えられるのは、他の移民との間で発生した一世のBOCPだけであり、これが一時的なものだとすればクレオール化が起こる可能性がない。



### 3. 中間言語とブラジル沖繩コロニア語

中間言語は、L2の習得過程で話者の母語とTLの間にできる言語体系である（ロング2010:4）。前述したように、一世のBOCP、二世のBOCR、BOCJはL2の習得過程で発生しており、TLの不完全な習得が見られる（例11～19）。したがって、狭義のブラジル沖繩コロニア語は、中間言語であると見なすことができる。ただし、L1の変容した形は中間言語ではないため、ブラジル沖繩コロニア語全体として＝中間言語だと言いきることはできない。

ロングが中間言語の特徴として挙げる特徴を表3にまとめた。ここでは、世代差が重要であるため一世と二世にわけて比較することにする。

まず、琉球語の場合を考えると、一世にとって琉球語はL2ではなく、L1（の変容した形）である。二世の話すBOCRは、L2の習得過程でL1（この場合は、ポルトガル語）の影響または不完全な習得の結果として生じている（イ、ロ、ハ）。つまり、二世にとってL1ではないといえる（ニ）。また、一時的な現象である（ホ）、話者個人が作り上げる言語体系である（ヘ）、話者の頭の中に存在する（ト）という点でも、二世のBOCRは、常に変化の過程にあり、一定の決まりはなく、個人差も大きいため中間言語の分類に当てはまるといえる。

同じく、日本語の場合を考えると、一世にとって日本語はL2ではなく、L1（の変容した形）である。二世の話すBOCJは、L2の習得過程でL1の影響または不完全な習得の結果として生じている（イ、ロ、ハ）。つまり、二世にとってL1ではないといえる（ニ）。また、一時的な現象である（ホ）、話者個人が作り上げる言語体系である（ヘ）、話者の頭の中に存在する（ト）という点でも、二世のBOCJは、常に変化の過程にあり、一定の決まりはなく、個人差も大きいため中間言語の分類に当てはまるといえる。

一方、ポルトガル語の場合を考えると、二世にとってポルトガル語はL2ではなく、L1である。一世のBOCPは、L2の習得過程でL1の影響または不完全な習得の結果として生じており（イ、ロ、ハ）、一世にとってL1ではない（ニ）。また、一時的な現象である（ホ）、話者個人が作り上げる言語体系である（ヘ）、話者の頭の中に存在する（ト）という点でも、一世のBOCPは、中間言語の分類に当てはまる。

以上のことを表3のようにあらわすことができる。表からわかるようにブラジル沖繩コロニア語は中間言語の特徴を持つが、これは狭義のブラジル沖繩コロニア語だけである。今後は、ブラジル沖繩コロニア語の中間言語としての特徴が薄れると予測される。一世話者の数が減るものの、NHK放送の普及、出稼ぎ現象、日本への留学のおかげで現在二世のBOCJの標準日本語化が進んでいるのである。また、現在一世も完全にブラジル社会に溶け込んでいるため、彼らのポルトガル語力は徐々に上がる傾向にあると思われる。

表3 中間言語とブラジル沖縄コロニア語との比較

中間言語	BOCR		BOCJ		BOCP	
	一世	二世	一世	二世	一世	二世
イ) L2の習得過程で生じる	—	○	—	○	○	—
ロ) L1の影響の結果として生じる	—	○	—	○	○	—
ハ) 不完全な習得の結果として生じる	—	○	—	○	○	—
ニ) L1ではない	—	○	—	○	○	—
ホ) 一時的な現象である	—	○	—	○	○	—
ヘ) 話者個人が作り上げる言語体系である	—	○	—	○	○	—
ト) 話者の頭の中に存在する言語体系である	—	○	—	○	○	—

#### 4. 混合言語とブラジル沖縄コロニア語

ロング（2010：25）は、混合言語は「2つだけの言語が接触するとき生じる接触言語である」としている。この定義に従えば、ブラジル沖縄コロニア語はこの分類から外れる。だが、他の特徴ではブラジル沖縄コロニア語は混合言語と共通しており、ここではそれらを取り上げる。

ロングは「混合言語」を Bakker1994 が提案した Mixed Language の訳であると述べている。ブラジル沖縄コロニア語は、4言語以上が混合しているため、a) の条件を満たしていないことになるが、文字通りの Mixed Language で考えれば、ブラジル沖縄コロニア語は2つだけではないが、言語が混合している意味で混合言語であると言ってもいいかもしれない。その場合は、BOCR、BOCJ、BOCPだけでなくL1の変容した形も混合言語であるといえる。

また、前述したように、ブラジル沖縄コロニア語は「日本祖語」と「イベロ・ロマンス語」系統の言語が接触しているため、b) の接触する言語が別系統である点では、混合言語と共通している。

そして、c) の接触要素は、単純化しないまま絡み合っている点でも共通しているといえる。ピジンとクレオール項目でも述べたように、ブラジル沖縄コロニア語では複雑な体系が保たれているし、単純化が起きる場合もあるが、それは一般的ではない。

d) についていえば、ロング（2010:25）は「ピジン化の場合は語彙を提供する「上層言語」（1

表4 混合言語とブラジル沖縄コロニア語

混合言語	BOCR	BOCJ	BOCP
a) 2つだけの言語が接触する	×	×	×
b) (2つの言語は) 別系統の言語である	○	○	○
c) (2つの言語が) 単純化しないまま言語は絡み合っている	○	○	○
d) (2つの言語が) 同等に近い状態で混ざり合う	×	×	×

つ) とそれを習得しようとしている人々の母語である「基層言語」(2つ以上) という役割分担が明確であるが混合言語の場合は、2つの言語が同等に近い状態で混ざり合う」と述べている。ブラジル沖縄コロニア語では、語彙を提供する言語とその他の言語で役割が分担される(例えば、BOCPでは、ポルトガル語が語彙を提供する言語である)ため、この点では混合言語の分類に当てはまらないといえる。

## VII. 結論

言語接触の結果として、①一世の琉球語、②一世の琉球クレオロイド、③二世のポルトガル語が変容する。また、一世がL2としてポルトガル語を習得する過程で④BOCPが発生し、二世がL2として琉球語を習得する過程で⑤BOCR、また同じく二世がL2として日本語を習得する過程で⑥BOCJが発生する。

今後、一世話者の減少に伴い、琉球語、琉球クレオロイド、本土日本語を話す環境が減り、一世のL1の変容がますます進む一方、二世のL1の変容は起こらなくなると予想される。

また、一世のポルトガル語の習得状況と二世の琉球語、日本語の習得状況も変わりつつある。初期移民と戦後移民(新移民)とでも差が見られるが、二世につづき現在六世まで誕生しているブラジルではコミュニティ内でもポルトガル語への言語シフトが進んでおり、一世のポルトガル語のレベルは上がっている。一方、二世と三世でも大きな差が見られるが、家庭内で琉球語、琉球クレオロイド、本土日本語が話されなくなり、一世の言語はL2ではなく外国語として習得するようになりつつある。

また、ピジン、クレオール、中間言語、混合言語と比較した結果、狭義のブラジル沖縄コロニア語は中間言語であるといえるが、広義のブラジル沖縄コロニア語を分類できる接触言語のタイプがないという結論に至った。しかし、それぞれのタイプと共通する点があ

ることが明確になった。移民の歴史が古いハワイでは移民の言語が話されなくなり、移民の歴史が浅いボリビアでは現地語（スペイン語）との接触がブラジルほど起きていない。そう考えれば、現在、世界の沖繩系社会の中で、ブラジルが移民の言語と現地語との接触が最も活発に起きている場所であるといえる。

## 付記

※本論文のグロスで用いた略語は以下の通りである。

DAT：与格    DIM：指小辞    DSC：ディスコースマーカー    IMP：命令形  
INF：原型    FUT：未来形    GEN：所有格    MED：中止形    NOM：主格  
PAST：過去形    PRES：現在形    TEMP：時間格    1SG：1人称単数形  
3SG：3人称単数形

なお、本研究は JSPS 科研費・特別研究員奨励費の助成を受けたものである。

## 注

- 1) 「琉球クレオロイド」とは一般的に「ウチナーヤマトウグチ」と呼ばれているもので、琉球語話者が日本語を習得する過程で発生した日本語の変種である。この名称は、かりまた（2010：33）によるものである。
- 2) ブラジルへ移民した一世には、琉球語モノリンガル話者、琉球クレオロイドモノリンガル話者、琉球語と琉球クレオロイドのバイリンガル話者がいる。更にバイリンガル話者は、琉球語母語話者と琉球クレオロイド母語話者にわかれる。
- 3) ロング（2010：23）は、Trudgill1986に従って「コイネという現象は同一言語の多数の方言が接触するときに新たに生じる方言体系のことである」と述べている。
- 4) 本稿では、工藤 2001に従って、中国方言、四国方言、九州方言を総称して「西日本方言」と呼んでいる。
- 5) 「ぐわー」は、「小さいこと」、「少量であること」、「軽蔑」の意をあらわす琉球語の接尾辞である。
- 6) 儀保 2011, 2013 でも述べているように「コロニア語」とは「colônia（植民、植民地）」というポルトガル語の単語に由来し、日系社会において日本語と現地語との接触によって発生した言語を意味する。筆者は、世界の沖繩系人が話すコロニア語を「沖繩コロニア語」と呼び、ブラジル沖繩系移民社会の「沖繩コロニア語」をボリビア、ハワイなどと区別して「ブラジル沖繩コロニア語」と呼んでいる。
- 7) 「目標言語」は英語で「target language」であることから TL と略す。

- 8) いわゆる声門破裂音 (glottal stop) のことである。
- 9) 琉球クレオロイドは、移民前に既に発生し、移民時に既に一世の言語として確立していたため、本論では、ブラジル沖縄コロニア語の一つの接触要素として扱っている。
- 10) ピジンは、2つ以上の言語の接触から生じるという考え方もあるが、本稿では、ロング (2010: 5) に倣って、「言語接触論の主流の考え方に沿って、狭義のピジンが形成されるには、最低3つ以上の言語が接触していなければならないという立場を取る」。
- 11) Rickford&McWhorter (1998: 241)。
- 12) Rickford&McWhorter (1998: 241)。
- 13) 以下、表中の「○」は当てはまること、「×」は当てはまらないこと、「△」はある程度当てはまることを示す。

## 文献

- かりまたしげひさ (2010) 「琉球クレオロイドの性格」. 石原昌英・喜納育江・山城 新編『沖縄・ハワイ コンタクト・ゾーンとしての島嶼』彩流社, pp.31-42.
- 儀保ルシーラ悦子 (2011) 「ブラジル沖縄系移民社会における4言語接触—一世話者の言語に見られる語彙的・音韻的・文法的な特徴—」. 移民研究 第7号, pp.65-84.
- 儀保ルシーラ悦子 (2013) 「ブラジル沖縄コロニア語—その発生と特徴—」. 町田宗博・金城宏幸・宮内久光編『躍動する沖縄系移民 ブラジル, ハワイを中心に』彩流社, pp.153-175.
- 工藤真由美 (2001) 「アスペクト体系の生成と進化—西日本諸方言を中心に—」. ことばの科学 10, pp.117-173.
- ロング・ダニエル (2010) 「言語接触から見たウチナーヤマトウグチの分類」. 人文学報 (日本語教育学編) 第428号, pp.1-30.
- COULMAS, Florian (ed) (1998) *The Handbook of Sociolinguistics (Blackwell Handbooks in Linguistics)*. Wiley-Blackwell.
- HICKEY, Raymond (ed) (2010) *The Handbook of Language Contact (Blackwell Handbooks in Linguistics)*. Wiley-Blackwell.
- HOLM, John. (2010) 「Contact an Change : Pidgins and Creoles」 *The Handbook of Language Contact*. Wiley-Blackwell. pp. 252-261.
- MACKEY, Alison. 「Second language acquisition」 *An Introduction to Language and Linguistics*. Cambridge. pp.433-463.
- NOONAN, Michael. (2010) 「Genetic Classification and Language Contact」 *The Handbook of Language Contact*. Wiley-Blackwell. pp. 48-65.

RICKFORD, John R. & McWHORTER, John (1998) 「Language Contact and Language Generation : Pidgins and Creoles」 *The Handbook of Sociolinguistics (Blackwell Handbooks in Linguistics)*. Wiley-Blackwell. pp. 238-255.

THOMASON, Sarah Grey. & KAUFMAN, Terrence. (1988) *Language Contact, Creolization and Genetic Linguistics*. California.

WINFORD, Donald. (2003) *An Introduction to Contact Linguistics*. Blackwell Publishing.

WINFORD, Donald. (2010) 「Contact and Borrowing」 *The Handbook of Language Contact*. Wiley-Blackwell. pp. 170-187.

(るしーら えつこ ぎぼ・琉球大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程院生・言語学)

**“*Burajiru-Okinawa-Colonia-go*” viewed  
from the Language Contact Theory P.O.V.**

**Lucila Etsuko GIBO**

Graduate School of Humanities and Social Sciences

University of the Ryukyus, Okinawa, Japan

(Linguistics)

**Keywords:** language contact, Ryukyuan, Japanese, Portuguese, pidgin, creole, interlanguage, mixed language

This paper analyses the *Burajiru-Okinawa-Colonia-go* (Brazilian-Okinawan community language), i.e., the language spoken in the Okinawan community of Brazil, from the Language Contact Theory point of view. In the Brazilian-Okinawan community, contact occurs between many regional dialects of Ryukyuan, the mainland Japanese dialects, the Japanese variation spoken by Okinawans, and naturally, with Brazilian-Portuguese.

This linguistic contact causes (1) language change of the first-language (L1) due to lexical and grammatical borrowing, and (2) the birth of broken languages as a result of L1 influence in the process of second-language (L2) acquisition.

First, in this paper, these two phenomena are examined through the analysis of the Ryukyuan, Japanese, and Portuguese spoken by the first and second generations. Second, this paper diagrams the language family tree of the *Burajiru-Okinawa-Colonia-go*. And finally, an attempt is made to classify it as pidgin, creole, interlanguage, or mixed language, by analyzing its linguistic and social characteristics.